

在日中国人留学生における心理援助スティグマと学生相談室に関する情報が来談意思に与える影響の検討

唐, 毓青
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/6796235>

出版情報 : 九州大学総合臨床心理研究. 14, pp.39-45, 2023-03-20. Center for Clinical Psychology and Human Development, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



在日中国人留学生における心理援助スティグマと学生相談室に関する情報が来談意思に与える影響の検討

唐 毓青 九州大学大学院人間環境学府

要約

本研究では、在日中国人留学生148人を対象に質問紙調査を行い、心理援助スティグマと学生相談室に関する情報が来談意思に与える影響を調査し、あわせてストレス状態も検討した。心理援助スティグマと来談意思について調査した結果、在日中国人留学生の心理援助スティグマと学生相談室に対する来談意思には関連がないことが示唆された。学生相談室に関する情報と来談意思について調査した結果、学生相談室に関する情報の有無による来談意思の有意な差は認められなかった。一方、ストレスと来談意思について、「不安・うつ気分」といった心理的ストレスが高いほど、在日中国人留学生の学生相談室に対する来談意思が高くなることが示された。心理援助スティグマとストレスについて検討したところ、在日中国人留学生のうち心理援助スティグマが比較的高い学生は心理援助スティグマが比較的低い学生より、ストレスの程度は高く、援助が必要とされることも窺える。

キーワード：在日中国人留学生、学生相談、心理援助スティグマ、情報

問題と目的

1. 在日中国人留学生のストレス

異国の地での生活が始まると、通常では外国人留学生にはかなりのストレスがかかると予想される（柳・松田, 2011）。在日中国人留学生のストレスについて、英語を母語とする外国人と比較した調査（Ozeki, Knowles, Ushijima, & Asada, 2013）によると、中国語群は英語群より日本語がよくできるにも関わらず、精神健康度が悪い傾向にあった。稲井（2011）の調査でも、被調査者の87.7%に上る中国人留学生が「ストレスがある」と答え、「とても多い」が16.3%も占めている。以上のことより、中国人留学生は在日生活に適応していく過程の中で様々なストレスを抱えていることが考えられる。

2. 学生相談の現状と援助要請行動について

学生支援に関する全国調査によると、大学の学生相談機関の設置率は高いにも関わらず、来談率は低いことや（日本学生相談学会特別委員会, 2019）、悩みを抱えながらも相談に来ない学生への対応は、各大学の学生相談における共通の課題であること等が報告されている（日本学生支援機構, 2018）。問題を抱えた学生が学生相談に援助を求めるということは、援助要請行動と見ることが出来る。援助要請行動の定義は研究者によって異なるが、本研究では水野・石隈（1999）を参考に、援助要請行動を「大学生が情緒的、行動的問題および現実生活における中心的な問題で、学生相談室に来談する行動」と定義する。また、来談意思を実際の来談行動を推測するための指標として使用する（Blier, Atkinson, & Geer, 1987）。

3. 心理援助スティグマ

援助要請の障害要因の中心的な概念としてスティグマが提唱される。精神疾患や治療を求めることに対するスティグマは、人々がカウンセリングやその他のメンタルサービスを求めない大きな原因として挙げられる（Corrigan, 2004）。Corrigan（2004）によって心理的援助を求めることに関連するスティグマは社会的スティグマと自己スティグマの2つに分けられた。社会的スティグマとは、「心理的支援を求める人が望ましくない、あるいは社会的に受け入れられないという公的認識」と説明され、自己スティグマとは「自分自身を社会的に受け入れられないとラベルづけることによって生じる個人の自尊心や自己価

値の低下」と定義される（Vogel, Wade, & Haake, 2006）。心理的援助を求めることに関連するスティグマと来談意思について、Vogel, Wade, & Hackler（2007）は、社会的スティグマは自己スティグマを予測し、その結果、専門的心理的援助要請態度、そして最終的には来談意思を予測すると指摘した。赫・梁（2015）は、社会的スティグマと来談意思において、自己スティグマと専門的心理的援助要請態度がそれぞれ仲介していると論じた。大学生の来談行動について、高野・宇留田（2002）は、学生が援助要請行動を取る際に心理面での負担（“心理的コスト”）が付随すると述べ、そのコストの1つとして心理的援助を求めることに関連するスティグマが挙げられた。江・王（2003）でも中国人大学生を対象に専門的心理的援助要請を阻害する要因について検討したところ、「カウンセリングを受けると周りに議論される恐れがある」、「自身のことを他人に知られたくない」、「カウンセラーの腕前を疑問に思う」から構成される「メンツを重んじる」は障害要因の1つであると論じられた。以上より、心理的援助を求めることに関連するスティグマは相談室への来談行動を抑制する要因の1つである可能性が考えられる。なお、本研究では「心理援助スティグマ」を「心理的援助を求めることに関連するスティグマ」の略称として使用する。

4. 学生相談室に関する情報

学生の来談を考える際には、学生相談機関についての情報をどの程度得ているかということが重要な要因の1つであると考えられる。伊藤（2006）は日本人大学生を対象に学生相談機関の“存在”、“場所”、“開室日時”を尋ねたところ、それらの周知度が高い学生ほど来談意思を高く見積っている傾向があると示唆した。小池・若井・益田（2010）でも、学生相談機関の「場所」、「費用（無料）」の認知と援助要請行動との間に正の関連があると指摘された。以上のことより、学生相談室に対する情報の増加は、学生相談室に来談しやすくなることに繋がると考えられる。

5. 目的

本研究では、在日中国人留学生の心理援助スティグマと学生相談室に関する情報の現状を把握した上で、心理援助スティグマと学生相談室に関する情報が来談意思にどのように影響しているのかについて明らかにすることを目的とした。在日中国人

留学生のストレス状態についても合わせて検討を行い、留学生が必要に応じて援助を獲得できるようにするための支援を考える際の一助となることを目指す。

方法

1. 調査協力者

2020年11月に、A大学に在学する平均年齢25.90歳 (SD=4.02) の在日中国人留学生148名 (男性56名, 女性92名) を対象に、A大学の在日中国人留学生が主要なメンバーとなっている WeChat のグループチャットで質問紙調査を行った。

2. 調査内容

- (1) フェイスシート：年齢、性別、国籍、来日期間、大学名、キャンパス、在学年数、教育課程、学年、相談経験についての記入を求めた。
- (2) 心理援助スティグマを測定する尺度：
 - 1) 社会的スティグマ：The 5-item Stigma Scale for Receiving Psychological Help (Komiya, Good, & Sherrod, 2000) の中国語版 (Zhou, Lemmer, Xu, & Rief, 2019)。5項目を4件法で評定。
 - 2) 自己スティグマ：The 10-item Self-Stigma of Seeking Help Scale (Vogel et al., 2006) の中国語版 (Vogel et al., 2013)。10項目を5件法で評定。
- (3) 学生相談室に対する来談意思を測定する尺度：Intention of Seeking Counseling Inventory (Cash, Begley, McCown, & Weise, 1975) の中国語版 (Song, 2017)。17項目を6件法で評定。
- (4) 学生相談室に関する情報を測定する質問項目：伊藤 (2006)；小池ら (2010)；吉田 (2013) を参考に、「存在」、「場所」、「利用料」、「開室日時」、「利用するための手続き方法」の5項目を2件法で評定。
- (5) ストレスを測定する尺度：ストレスチェックリスト・ショートフォーム (今津ら, 2006) をバックトランスレーションの手順 (稲田, 2015) を踏まえ、中国語版に翻訳した。24項目を3件法で評定。
- (6) 追加質問項目：希望する学生相談の相談方法。新型コロナウイルス流行前後で学生相談に行く気持ちの変化。

3. 倫理的配慮

紙面にて、回答は任意であり、同意しない場合においては

かなる不利益も被ることはないこと、途中で辞退しても構わないこと、匿名での回答を求め、個人が特定されることはなく個人情報保護を厳重に行うことを説明した上で調査の協力を依頼した。

結果

1. 各尺度の検討：各指標の記述統計量は表1に示す。

なお、社会的スティグマと、自己スティグマ、来談意思、ストレスを測定する尺度は、先行研究においてはアジア大学生を対象として調査が進められたが、本研究における調査対象者は在日中国人留学生となっており、集団の質がやや異なるため、探索的因子分析を行った。

(1) 社会的スティグマ尺度の因子分析

全5項目に対して因子分析 (主因子法) を行った結果、Komiya et al. (2000) と同様、1因子を抽出し、「社会的スティグマ」と命名した。因子負荷量はすべて.70以上の項目により構成されている。Cronbach の α 係数は.87であり内的整合性を備えていると考えられる。項目平均値により社会的スティグマ得点を算出した。

(2) 自己スティグマ尺度の因子分析

全10項目に対して因子分析 (主因子法・プロマックス回転) を行った結果、「5. カウンセラーに相談することを選んだからといって、自分への見方は変わらないだろう。」の共通性は.16より低いため削除し、最終的に9項目2因子構造を得た。王嘉琪 (2010) を参考に、「3. カウンセラーのところへ相談に行くことで、自分は知的に劣っていると感じてしまうだろう。」などの5項目を第1因子とし、「自己肯定感の低下」と命名した。また、「4. カウンセラーに相談することで、自分の価値や能力に対してより自信を持てるようになるだろう。(逆転項目)」といった4項目を第2因子とし、「自信の喪失」と命名した。各因子への因子負荷量はすべて.40以上の項目により構成されており、因子間相関は-.36であった。これらの2下位尺度について Cronbach の α 係数は、「自己肯定感の低下」で.81、「自信の喪失」で.62とおおむね内的整合性を備えていると考えられる。項目平均値により各下位尺度得点及び総合得点を算出した。

(3) 来談意思尺度の因子分析

全17項目に対して因子分析 (主因子法) を行った結果、「1. 体重管理。」と「4. 性的懸念。」の共通性は.16より低いため削除

表1 各指標の記述統計量

	項目数	<i>M</i>	<i>SD</i>	相関係数									α係数
				1	2	2.1	2.2	3	4	4.1	4.2	5	
1. 社会的スティグマ	5	.58	.58	—									.87
2. 自己スティグマ	9	2.21	.57	.53 **	—								.74
2.1 自己肯定感の低下	5	1.96	.71	.63 **	.84 **	—							.81
2.2 自信の喪失	4	2.52	.73	.18 *	.75 **	.26 **	—						.62
3. 来談意思	15	3.31	1.11	.17 *	-.00	.12	-.16	—					.92
4. ストレス	20	.78	.40	.15	.17 *	.26 **	-.02	.42 **	—				.91
4.1 不安・うつ気分	12	.83	.49	.10	.18 *	.27 **	-.01	.43 **	.94 **	—			.91
4.2 身体反応・自律神経症状	8	.71	.40	.18 *	.09	.16 *	-.03	.26 **	.78 **	.51 **	—		.78
5. 学生相談室に関する情報	5	7.30	1.46	-.08	-.15	-.12	-.12	.01	.10	.06	.13	—	.75

** $p < .01$, * $p < .05$

し、最終的に15項目1因子構造を得た。因子負荷量はすべて.50以上の項目により構成されている。Cronbachの α 係数は.92であり内的整合性を備えていると考えられる。項目平均値により来談意思得点を算出した。

(4) 学生相談室に関する情報得点の算出：伊藤（2006）；小池ら（2010）；吉田（2013）を参考に、5項目の粗点の和を情報得点とした。Cronbachの α 係数は.75であった。

(5) ストレス尺度の因子分析

全24項目に対して因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った結果、「7.好きなものでも食べる気がしない。」「9.何かするとすぐ疲れる。」「24.私の努力を正当に評価してくれる人が欲しいと思う。」は因子負荷量が.40に満たさない、「13.体がだるくなかなか疲れがとれない。」は複数の因子における高い因子負荷量により削除し、最終的に20項目2因子構造を得た。今津ら（2006）を参考に、第1因子は「不安・うつ気分」、第2因子は「身体反応・自律神経症状」と命名した。各因子への因子負荷量はすべて.40以上の項目により構成されており、因子間相関は.52であった。これらの2下位尺度についてCronbachの α 係数を求めたところ、すべて.78以上でありほぼ内的整合性を備えていると考えられる。項目平均値により各下位尺度得点及び総合得点を算出した。

2. 心理援助スティグマと学生相談室に対する来談意思との関連

社会的スティグマを予測変数、自己スティグマを目的変数とした単回帰分析を行った結果、社会的スティグマが自己スティグマの合計点（ $\beta=.53$, $p<.001$ ）または下位尺度である「自己肯定感の低下」（ $\beta=.63$, $p<.001$ ）へ有意に影響していることが確認されたため、社会的スティグマと自己スティグマそれぞれ検討することにした。心理援助スティグマの来談意思への影響を検討するため、来談意思を目的変数、社会的スティグマと自己スティグマを予測変数とし、それぞれ単回帰分析もしくは重回帰分析を行った。社会的スティグマと来談意思の単回帰分析の結果 R^2 は.03、自己スティグマと来談意思の重回帰分析の結果 R^2 は.05と十分な説明力のある回帰式を得られなかった。

心理援助スティグマと来談意思との関連を検討するため、社会的スティグマと自己スティグマをクラスタ分析により、それぞれ2つのクラスタに分類した。社会的スティグマは「社会的スティグマ低群」（ $n=95$ ）と「社会的スティグマ高群」（ $n=53$ ）、自己スティグマは「自己スティグマ低群」（ $n=90$ ）と「自己スティグマ高群」（ $n=58$ ）に分けた。各クラスタと来談意思の関連をt検定により検討したところ、社会的スティグマ（ $t(146)=-1.38$, $p=.17$, $d=.24$ ）と自己スティグマ（ $t(146)=.91$, $p=.37$, $d=.16$ ）の両方とも有意な差は見られなかった。

3. 学生相談室に関する情報の有無による来談意思の差異

学生相談室の存在を「知っていた」と回答した学生は83.1%、「知らなかった」と回答した学生は16.9%であった。t検定を行ったところ、学生相談室の存在という情報の有無による来談意思の有意な差は見られなかった（ $t(146)=1.08$, $p=.28$, $d=.24$ ）。所在キャンパスにある学生相談室の場所を「知っていた」と回答した学生は37.8%、「知らなかった」と回答した学生は62.2%であった。t検定を行ったところ、学生相談室の場所という情報の有無による来談意思の有意な差は見られなかった（ $t(146)=.58$, $p=.56$, $d=.10$ ）。無料でカウンセリングを受けられることを「知っていた」と回答した学生は74.3%、「知らなかった」

表2 ストレスと来談意思の重回帰分析結果

	B	SE B	β
説明変数			
不安・うつ気分	.91	.20	.40***
身体反応・自律神経症状	.15	.24	.06
R^2	.18***		

基準変数：来談意思

*** $p<.001$

と回答した学生は25.7%であった。t検定を行ったところ、学生相談室の利用料（無料）という情報の有無による来談意思の有意な差は見られなかった（ $t(146)=.28$, $p=.78$, $d=.15$ ）。学生相談室の開室日時を「知っていた」と回答した学生は17.6%、「知らなかった」と回答した学生は82.4%であった。t検定を行ったところ、学生相談室の開室日時という情報の有無による来談意思の有意な差は見られなかった（ $t(146)=-.67$, $p=.51$, $d=.14$ ）。学生相談室を利用するための手続き方法を「知っていた」と回答した学生は17.6%、「知らなかった」と回答した学生は82.4%であった。t検定を行ったところ、学生相談室を利用するための手続き情報という情報の有無による来談意思の有意な差は見られなかった（ $t(146)=-1.96$, $p=.05$, $d=.01$ ）。

4. ストレスの学生相談室に対する来談意思への影響

来談意思を目的変数とした重回帰分析の結果、ストレスの下位尺度である「不安・うつ気分」が来談意思に正の影響を与えていることが示された（表2）。

5. 心理援助スティグマとストレスとの関連

心理援助スティグマのストレスへの影響を検討するため、ストレスを目的変数、社会的スティグマと自己スティグマを予測変数とし、それぞれ単回帰分析もしくは重回帰分析を行った。社会的スティグマとストレスの下位尺度である「不安・うつ気分」の単回帰分析の結果、回帰式全体は有意ではなかった（ $R^2=.01$ ）。社会的スティグマとストレスの下位尺度である「身体反応・自律神経症状」の単回帰分析の結果、 R^2 は.03と十分な説明力のある回帰式を得られなかった。自己スティグマとストレスの下位尺度である「不安・うつ気分」の重回帰分析の結果、自己スティグマの下位尺度である「自己肯定感の低下」から「不安・うつ気分」に対する標準偏回帰係数（ $\beta=.29$ ）が有意な値ではあったが、回帰式の R^2 は.08、と説明力が弱いと考えられる。「身体反応・自律神経症状」の重回帰分析の結果、回帰式全体は有意ではなかった（ $R^2=.03$ ）。

スティグマとストレスとの関連を検討するため、社会的スティグマと自己スティグマをクラスタ分析により、それぞれ2つのクラスタに分類し、各クラスタとストレスの関連をt検定により検討した。ストレスの下位尺度である「身体反応・自律神経症状」のt検定の結果、有意な差が見られ（ $t(146)=-2.04$, $p<.05$, $d=-.34$ ）、「社会的スティグマ」の得点が平均値より高かった「社会的スティグマ高群」で「身体反応・自律神経症状」は有意に高かった（表3.1-3.2）。ストレスのt検定の結果、有意な差は見られなかったが、下位尺度である「不安・うつ気分」のt検定の結果、有意な差が見られ（ $t(146)=2.38$, $p<.05$, $d=.37$ ）、自己スティグマの下位尺度である「自己肯定感の低下」の得点が平均値より高かった「自己否定スティグマ高群」において「不安・うつ気分」は有意に高かった（表4.1-4.2）。

表3.1 クラスタと社会スティグマ因子の平均値と標準偏差 (N=148)

因子名	CL1 (n = 95)		CL2 (n = 53)	
	M	(SD)	M	(SD)
社会的スティグマ	-.65	.48	1.17	.48

※因子得点はz得点で示してある

表3.2 各クラスタ×ストレスのt検定結果

	CL1 (n = 95)		CL2 (n = 53)		t 値
	M	(SD)	M	(SD)	
不安・うつ気分	.79	.49	.91	.47	-1.42
身体反応・自律神経症状	.66	.38	.80	.43	-2.04 *

* $p < .05$

考察

1. 心理援助スティグマと学生相談室に対する来談意思

本研究においては、在日中国人留学生の心理援助スティグマと学生相談室に対する来談意思には関連がないことが示唆された。その原因について、以下の四つがあると考ええる。

(1) 調査対象の学歴による心理援助スティグマの低さ

本研究における調査対象者の基本属性を見ると、148人のうち学部生は7人しかおらず、修士・専門職学位課程と博士課程に在学する学生（研究生を含む）は全体の95.2%も占める。高学歴であるほどメンタルヘルスに関する教育を受ける機会が多くなる可能性があるため、心理援助スティグマの程度は低くなると考える。Surgenor (1985) では援助要請態度の影響要因について検討したところ、教育レベルは高いほど肯定的な援助要請態度を示し、援助要請行動を行いやすいという結果も示されている。

(2) 援助要請態度の仲介作用の必要性

赫・梁 (2015) では社会的スティグマと来談意思において、自己スティグマと専門的・心理的援助要請態度がそれぞれ仲介していることを論じた。つまり、社会的スティグマが自己スティグマを媒介して来談意思に影響するモデルと、社会的スティグマが専門的・心理的援助要請態度を媒介して来談意思に影響するモデルの2つのモデルが提示された。Vogel, Wade & Hackler (2007) でも、社会的スティグマと来談意思における自己スティグマと専門的・心理的援助要請態度の仲介作用について検討したところ、社会的スティグマは自己スティグマと正の関連があり、自己スティグマは専門的・心理的援助要請態度と負の関連があり、専門的・心理的援助要請態度は専門的・心理的援助の来談意思と正の関連があると指摘した。以上のことより、スティグマが態度を媒介して来談意思に影響を及ぼす可能性が推察される。本研究においては、社会的スティグマが自己スティグマを媒介して来談意思に影響するモデルの検証を行ったところ、モデルは成立しなかった。しかし、援助要請態度が取り入れられる場合には、モデルが成立することになる可能性もあると考える。

(3) 調査協力者の選定方法による心理援助スティグマの低さ

本研究においては、調査対象である在日中国人留学生が主要なメンバーとなっている WeChat のグループチャットで WEB 調査を依頼した。調査への協力は任意であったため、依頼に応じた学生の中には、もともと心理学について興味関心を持っている学生が多く、心理援助スティグマの程度が低い人の割合が大きくなった可能性が考えられる。

(4) 調査方法による心理援助スティグマの低さ

社会心理学の二重態度モデルによれば、人が他者や物事に対

表4.1 クラスタと「自己肯定感の低下」の平均値と標準偏差 (N=148)

因子名	CL1 (n = 69)		CL2 (n = 79)	
	M	(SD)	M	(SD)
自己肯定感の低下	.86	.76	-.75	.40

※因子得点はz得点で示してある

表4.2 各クラスタ×「不安・うつ気分」のt検定結果

	CL1 (n = 69)		CL2 (n = 79)		t 値
	M	(SD)	M	(SD)	
不安・うつ気分	.93	.49	.74	.46	2.38'

* $p < .05$

して持つ態度には、意識的な態度である顕在的態度と、より無意識的な態度である潜在的態度の2つがある。顕在的態度は自己報告式質問紙調査によって調べることが出来るが、潜在的な態度は社会的承認や自己防衛意識に影響されやすいため、自己報告式質問紙調査には限界があると考えられる(陳浩彬, 2019)。

本研究においては、調査対象である在日中国人留学生が主要なメンバーとなっている WeChat のグループチャットで WEB 調査を依頼した。無記名調査ではあるが、調査協力者が社会的承認や自己防衛意識のため自分の本音ではなく社会にとって望ましいと思われる回答をした可能性があり、心理援助スティグマが低くなると考える。

また、先行研究の結果と比較したところ、本研究における調査対象である在日中国人留学生の心理援助スティグマの程度が低いことが示された。

(1) 社会的スティグマ

先行研究の結果と比較したところ、本研究における調査対象である在日中国人留学生の社会的スティグマの程度が低いことが示された。

植松ら (2013) は320名の日本人大学生を対象に社会的スティグマについて調査したところ、平均値は5.20で、標準偏差は3.70であった。本研究の社会的スティグマ得点について、総項目の粗点の和により算出すると、平均値は2.89で、標準偏差は2.88であった。本研究と植松ら (2013) の社会的スティグマの平均値に差があるかどうかを調べるため、Welch の方法による対応のない2標本t検定を行った。その結果、「本研究と植松ら (2013) の社会的スティグマの平均値には差がある」という対立仮説が採択され、植松ら (2013) の調査対象者である日本人大学生に比べ、本研究における調査対象者である在日中国人留学生の社会的スティグマが有意に低いと考えられる。

王嘉琪 (2010) は666名の台湾の大学生を対象に社会的スティグマについて調査したところ、平均値は3.92で、標準偏差は3.31であった。本研究の社会的スティグマ得点について、総項目の粗点の和により算出すると、平均値は2.89で、標準偏差は2.88であった。本研究と王嘉琪 (2010) の社会的スティグマの平均値に差があるかどうかを調べるため、Welch の方法による対応のない2標本t検定を行った。その結果、「本研究と王嘉琪 (2010) の社会的スティグマの平均値には差がある」という対立仮説が採択され、王嘉琪 (2010) の調査対象者である台湾の大学生に比べ、本研究における調査対象者である在日中国人留学生の社会的スティグマが有意に低いと考えられる。

(2) 自己スティグマ

社会的スティグマを予測変数、自己スティグマを目的変数と

した単回帰分析を行ったところ、社会的スティグマが自己スティグマへ有意に影響していることが確認された ($\beta = .53, p < .001$)。つまり、社会的スティグマが低い人ほど、自己スティグマは低くなると言える。また、先行研究の結果と比較したところ、本研究における調査対象である在日中国人留学生の自己スティグマの程度が低いことも示された。

Ina & Morita (2015) は435名の日本人大学生を対象に自己スティグマについて調査したところ、平均値は2.21で、標準偏差は0.57であった。本研究の自己スティグマ総合得点について、総項目の粗点の和を項目数で除した得点により算出すると、平均値は2.21で、標準偏差は0.57であった。本研究と Ina & Morita (2015) の自己スティグマの平均値に差があるかどうかを調べるため、Welch の方法による対応のない2標本t検定を行った。その結果、「本研究と Ina & Morita (2015) の自己スティグマの平均値には差がある」という対立仮説が採択される。よって、Ina & Morita (2015) の調査対象者である日本人大学生に比べ、本研究における調査対象者である在日中国人留学生の自己スティグマが有意に低いと考えられる。

王嘉琪 (2010) は666名の台湾の大学生を対象に自己スティグマについて調査したところ、平均値は20.92で、標準偏差は5.34であった。本研究の自己スティグマ総合得点について、総項目の粗点の和により算出すると、平均値は19.9で、標準偏差は5.14であった。本研究と王嘉琪 (2010) の自己スティグマの平均値に差があるかどうかを調べるため、Welch の方法による対応のない2標本t検定を行った。その結果、「本研究と王嘉琪 (2010) の自己スティグマの平均値には差がある」という対立仮説が採択され、王嘉琪 (2010) の調査対象者である台湾の大学生に比べ、本研究における調査対象者である在日中国人留学生の自己スティグマが有意に低いと考えられる。

2. 学生相談室に関する情報と来談意思

本研究においては、学生相談室に関する情報を把握しているか否かが学生相談に対する来談意思に影響を及ぼすかを検討するため、t検定を行った。その結果、それらに有意な差は見られなかった。その原因の一つとして、学生相談室に関する情報を「知っていた」と回答した学生と「知らなかった」と回答した学生との人数に大きな偏りがあったことが想定される。

一方、本研究の結果を詳しく見ると、学生相談室の存在、利用料（無料）を「知っていた」と回答した学生はそれぞれ83.1%、74.3%であったが、所在キャンパスにある学生相談室の場所、開室日時、利用するための手続き方法を「知っていた」と回答した学生はそれぞれ37.8%、17.6%、17.6%しかなかった。新入生オリエンテーションの際の各学生へのパンフレットの配布や、ホームページでの情報掲載など、学生相談についての広報が行われている。しかしながら、在日中国人留学生としては、学生相談室について漠然としたイメージしか持っておらず、学生相談室に関する具体的な情報を把握していないことが窺える。学生相談の利用をよりイメージしやすくするため、所在キャンパスにある学生相談室の場所、開室日時、利用する際の相談申込みから面接が始まるまでの大まかなプロセスについて、周知度を高めるような更なる広報活動が必要だと考える。

3. ストレスと学生相談室に対する来談意思

木村・梅垣・水野 (2014) は問題の生起から実際の援助要請行動に至るまでのプロセスモデルを検討し、問題が生起したと

きにそれは普通でないと認識するかどうかである「問題の認識」、認識した問題に対処する必要があるかの判断である「問題への対処」、他者に援助要請を検討するかどうかである「援助要請の検討」は、援助要請プロセスにおいて最初の3つのフィルターに位置付けられていると指摘した。困難な状況への気づきやストレスによる利用ニーズの存在は、援助要請行動の生起には必須の要因であると考えられる。また、中岡ら (2011) では大学生を対象に調査を行い、悩みの程度と援助要請意図との関連について検討したところ、悩みの存在が援助要請意図に影響を及ぼしていることを指摘した。問題が深刻になったり、自分では解決できない難しい問題を抱えたりした場合、カウンセラーに求める援助ニーズが高まるため、カウンセラーへの援助要請意図も促進されると論じた。本研究においては、「不安・うつ気分」が在日中国人留学生の学生相談室に対する来談意思に影響を与えていることが示され、「不安・うつ気分」が高い人ほど、来談意思は高くなると言える。「不安・うつ気分」といった心理的ストレスが高いほど利用ニーズが高まることから、援助を求めやすくなると考えられる。

4. 心理援助スティグマとストレス

(1) 社会的スティグマとストレス

心理的援助を求めることに関連する社会的スティグマは、心理的支援を求める人に対するステレオタイプ、偏見、差別に繋がっている (Corrigan, 2004)。社会による否定的な反応を回避するために、個人が心理的支援を求めなくなる可能性が考えられる。坂本・丹野 (1996) でも、精神疾患に対する偏見は、発症後の精神科受診を遅らせ、症状を悪化させる原因となると指摘されている。本研究では、社会的スティグマを強く持っている在日中国人留学生のほうが、スティグマの程度が低い学生と比べて「身体反応・自律神経症状」が強いことが分かった。社会的スティグマを持つことで、適切な治療を受ける機会を逃すことにつながり、「身体反応・自律神経症状」が強くなる可能性が考えられる。

(2) 自己スティグマとストレス

山田 (2015) は統合失調症患者を対象に、セルフスティグマ（精神障害者本人が持つ、人々から軽視され社会に受け入れられないという偏見）が自尊感情に与える影響について検討したところ、セルフスティグマは抑うつ状態を介して自尊感情に負の影響を与えていることを指摘した。セルフスティグマと抑うつ状態の関連について、セルフスティグマが高くなると抑うつ状態も高くなると論じた。本研究では、「自己肯定感の低下」というスティグマを強く持っている在日中国人留学生のほうが、スティグマの程度が低い学生と比べて「不安・うつ気分」が強いことが分かった。自己スティグマを持つことで、自尊心や自己価値の低下が生じ、「不安・うつ気分」が強くなる可能性が考えられる。

(3) 心理援助スティグマとストレス

先行研究の結果と比較したところ、本研究における調査対象である在日中国人留学生のスティグマの程度が低いことが示された。また、在日中国人留学生のうち、社会的スティグマの程度が比較的高い群は、スティグマの程度が比較的低い群より、「身体反応・自律神経症状」の程度は高いということが伺えた。また、「自己肯定感の低下」という自己スティグマの程度が比較的高い群は、スティグマの程度が比較的低い群より、「不安・う

つ気分」の程度は高いということが伺えた。在日中国人留学生のうち、スティグマが比較的高い学生は、スティグマが比較的低い学生より、援助が必要とされると言える。このことから、在日中国人留学生のストレス状態を改善するためには、スティグマの軽減に焦点を当てた介入を行うことも重要な手法の一つであると考えられる。

本研究の限界と今後の課題

本研究は、社会的スティグマが自己スティグマを媒介して来談意思に影響するという一つのモデルの検証しか行わなかったが、先行研究では、スティグマが援助要請態度を媒介し来談意思に影響を及ぼす可能性も示唆されている。したがって、今後の研究においては、援助要請態度が取り入れられる場合のモデルを検討する必要があると考える。また、本研究においては、A大学の在日中国人留学生は心理援助スティグマが比較的低いことと、学生相談室に関する情報の把握には偏りがあることが示されたが、対象者が少なく、かつ一大学の学生に限定されているため、今回の結果を一般化することは困難である可能性が考えられる。さらに、在日中国人留学生の心理的援助を求めることに対する態度を把握する際に、自己報告式質問紙調査には限界があるため、質的調査を行うことで、在日中国人留学生における心理援助スティグマの様相や学生相談に対する認識をより明らかにする必要もあると考える。

〈付記〉

本稿は、九州大学大学院人間環境学府実践臨床心理学専攻に提出した専門職学位論文の一部に、加筆・修正を加えたものです。本調査にご協力いただきました皆様をはじめ、研究における計画から執筆までご指導いただきました九州大学大学院の増田健太郎先生、サポートをくださった同期と研究室の皆様にご心よりお礼申し上げます。

文献

- Blier, M. J., Atkinson, D. R., & Geer, C. A. (1987). Effect of client gender and counselor gender and sex roles on willingness to see the counselor. *Journal of Counseling Psychology*, 34 (1), 27-30. (最終閲覧日: 2020年10月22日).
- Cash, T.F., Begley, P.J., McCown, D.A., & Weise, B. C. (1975). When counselors are heard but not seen: initial impact of physical attractiveness. *Journal of Counseling Psychology*, 22 (4), 273-279.
- 陳浩彬 (2019) 中国人の人間関係心理—揭示中国人心理与文化的行為機制. 北京师范大学出版社.
- Corrigan, Patrick. (2004). How Stigma Interferes With Mental Health Care. *The American psychologist*. 59, 614-25. 10.1037/0003-066X.59.7.614.
- Deane, Frank & Chamberlain, Kerry. (1994). Treatment Fearfulness and Distress as Predictors of Professional Psychological Help-seeking. *British Journal of Guidance & Counselling - BRIT J GUID COUNS*. 22, 207-217. 10.1080/03069889400760211.
- 独立行政法人日本学生支援機構 (2007). 「大学における学生相談体制の充実方策について—「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・協働」—」. https://www.jasso.go.jp/gakusei/archive/_icsFiles/afiedfile/2015/12/09/jyujitsuhausaku_2.pdf (最終閲覧日: 2020年11月25日).
- 独立行政法人日本学生支援機構 (2018). 「大学等における学生支援の取組状況に関する調査 (平成29年度)」結果報告. https://www.jasso.go.jp/about/statistics/torikumi_chosa/_icsFiles/afiedfile/2018/11/29/1_kikka.pdf (最終閲覧日: 2020年7月20日).
- 独立行政法人日本学生支援機構 (2020). 2019 (令和元) 年度外国人留

- 生在籍状況調査等について—留学生受入れの概況. https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student/_icsFiles/afiedfile/2020/04/21/data19_brief.pdf (最終閲覧日: 2020年7月20日).
- 赫志紅・梁宝勇 (2015). スティグマと来談意思の関連: 態度の仲介作用. *中国臨床心理学ジャーナル* (23), 6, 1133-1136.
- 今津芳恵・村上正人・小林恵・松野俊夫・椎原康史・石原慶子・城佳子・児玉昌久 (2006). Public Health Research Foundation ストレスチェックリスト・ショートフォームの作成—信頼性・妥当性の検討—*心身医学*, 46, 301-308.
- 稲井富赴代 (2011). 留学生サポートの改善に向けて—中国人留学生に対するアンケート調査から. *高松大学・高松短期大学研究紀要*. 54・55, 71-92.
- 稲田尚子 (2015). 尺度翻訳に関する基本指針. *行動療法研究*41 (2), 117-125.
- 伊藤直樹 (2006). 学生相談機関のイメージおよび周知度と来談意思. *心理学研究*. 76 (6), 540-546.
- Komiya, N., Good, G.E., & Sherrod, N. B. (2000). Emotional openness as a predictor of college students' attitude toward seeking psychological help. *Journal of Counseling Psychology*, 47 (1), 138-143.
- 木村真人・梅垣佑介・水野治久 (2014). 学生相談機関に対する大学生の援助要請行動のプロセスとその関連要因—抑うつと自殺念慮の問題に焦点をあてて—. *教育心理学研究*62, 173-186.
- 小池有紀・若井雅之・益田良子 (2010). 学生相談室に対する認知・意識と利用意思との関係—今後の学生相談活動の課題検討のために—. *中央学院大学商学部・法学部*. 30, 51-66.
- 梁恵 (2014). 日本語学校に在籍する中国人留学生のストレスとメンタルヘルス—社会環境ストレスに焦点をあてて—. *立教大学臨床心理学研究*. 8, 33-44.
- 柳佳慶・松田英子 (2011). 在日中国人留学生のストレスと異文化適応に関する研究—文化受容態度と自己効力感からの分析—. *情報と社会* (21), 151-160.
- 江光栄・王銘 (2003). 大学生の専門的心理的援助要請行動についての研究. *中国臨床心理学ジャーナル*, 3, 180-184.
- Mau, W.-c., & Jepsen, D. A. (1988). Attitudes toward counselors and counseling processes: A comparison of Chinese and American graduate students. *Journal of Counseling & Development*, 67 (3), 189-192.
- Moe Ina & Miyako Morita (2015). Japanese university students' stigma and attitudes toward seeking professional psychological help. *Online Journal of Japanese Clinical Psychology*, July Vol.2, 10-18.
- 水野治久・石隈利紀 (1999). 被援助志向性, 被援助行動に関する研究の動向. *教育心理学研究*, 47, 530-539.
- 中岡千幸・児玉憲一 (2009). 大学生用援助要請意図尺度の作成の試み. *総合保健科学: 広島大学保健管理センター研究論文集*. 25, 11-17.
- 中岡千幸・児玉憲一・高田純・黄正国 (2011). 大学生の心理カウンセラーへの援助要請意図モデルの検討—援助要請不安, 援助要請期待及び援助要請意図の関連—. *広島大学心理学研究*第11号, 215-224.
- 日本学生相談学会特別委員会 (2019). 2018年度学生相談機関に関する全国調査 (一部抜粋). <http://www.gakuseisodan.com/wp-content/uploads/2019/10/53ac2c3f63e1cecc6601b89780645c6a.pdf> (最終閲覧日: 2020年7月20日).
- Ozeki, N., Knowles, A., Ushijima, H., & Asada, Y. (2006). Analysis of transcultural stress factors and the mental well-being of foreign Chinese-speaking students in Aomori. *青森県立保健大学雑誌* 7 (1), 9-16.
- Rüsch, N., Angermeyer, M. C., & Corrigan, P. W. (2005). Mental illness stigma: concepts, consequences, and initiatives to reduce stigma. *European psychiatry: the journal of the Association of European Psychiatrists*, 20 (8), 529-539.
- 坂本真士・丹野義彦 (1996). 精神疾患への偏見の形成に与える要因の検討 (Ⅱ)—接触体験の欠如とメディアからの情報について—. *日本教育心理学会総会発表論文集*38, 307.
- 佐々木悠人・水野治久・永井智 (2017). 大学生の援助要請を阻害する要因の検討—スティグマが援助要請態度に与える影響の検討—. *大阪教育大学紀要*. 第4部門65 (2), 259-270.
- Steff, M.E., & Prosperi, D. C. (1985). Barriers to mental health service utilization. *Community mental health journal*, 21 (3), 167-178.

- Song Xiaoxia (2017). The Effects of a Multimedia Intervention on Help-Seeking Process with A Chinese College Student Sample. <https://www.semanticscholar.org/paper/The-Effects-of-a-Multimedia-Intervention-on-Process-Song/0067b43ea80628377560c3c7afd9953b84fb170a> (最終閲覧日：2020年9月28日).
- Surgenor, L. J. (1985). Attitudes toward seeking professional psychological help. *New Zealand Journal of Psychology*, 14, 27-33.
- 高野明・宇留田麗 (2002). 援助要請行動から見たサービスとしての学生相談. *教育心理学研究*, 50, 113-125.
- 植松晃子・橋本和幸・橋本麻耶・小室安広 (2013). 大学生を対象としたメンタルヘルス調査報告：学生相談室活動の展開を語る. *了徳寺大学研究紀要* (7), 71-81.
- Vogel, David & Wade, Nathaniel & Haake, Shawn. (2006). Measuring the self-stigma associated with seeking psychological help. *Journal of Counseling Psychology*, 53, 325-337. *Journal of Counseling Psychology*, 53, 325-337. 10.1037/0022-0167.53.3.325. (最終閲覧日：2020年10月6日).
- Vogel, David & Wade, Nathaniel & Hackler, Ashley. (2007). Perceived Public Stigma and the Willingness to Seek Counseling: The Mediating Roles of Self-Stigma and Attitudes Toward Counseling. *Journal of Counseling Psychology*, 54, 10.1037/0022-0167.54.1.40. (最終閲覧日：2020年10月6日).
- Vogel, D. L., Armstrong, P. I., Tsai, P.-C., Wade, N. G., Hammer, J. H., Efstathiou, G., Holtham, E., Kouvaraki, E., Liao, H.-Y., Shechtman, Z., & Topkaya, N. (2013). Cross-cultural validity of the Self-Stigma of Seeking Help (SSOSH) scale: Examination across six nations. *Journal of Counseling Psychology*, 60 (2), 303-310.
- 王嘉琪 (2010). The relationships among depression, self-esteem, self-disclosure, stigma, and help-seeking attitudes of college students in Taiwan. National Taiwan Normal University. <http://rportal.lib.ntnu.edu.tw:80/handle/20.500.12235/90961> (最終閲覧日：2021年1月12日).
- 山田光子 (2015). 統合失調症患者のセルフスティグマが自尊感情に与える影響. *日本看護研究学会雑誌* 38 (1), 85-91.
- 吉田彩翔 (2013). 学生相談機関に対する大学生のイメージ・知識と援助要請態度—学部による差異に着目して—. *立教大学臨床心理学研究*, 7, 23-25.
- Zhou, Y., Lemmer, G., Xu, J., & Rief, W. (2019). Cross-Cultural Measurement Invariance of Scales Assessing Stigma and Attitude to Seeking Professional Psychological Help. *Frontiers in psychology*, 10, 1249. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2019.01249> (最終閲覧日：2020年9月28日).

The Influence of Stigma of seeking mental health help and Information about the Student Counseling Center on the Help-seeking Intention among Chinese International Students in Japan

Yuqing TANG

Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University

This research study investigated the influence of stigma of seeking mental health and information about the Student Counseling Center on the intention to use the service, as well as the stress status of Chinese international students. A questionnaire was administered to 148 Chinese international students in Japan. The results suggested that stigma of seeking mental health is not related to the intention to visit the Student Counseling Center among Chinese international students. There was also no significant difference in the intention to use the Student Counseling Service depending on the availability of information about the Student Counseling Center. On the other hand, it was found that the higher the psychological stress, such as “anxiety and depressed mood”, the higher the intention of Chinese international students to use the Student Counseling Service. The results also showed that Chinese international students with relatively high stigma of seeking mental health had higher levels of stress and higher needs for assistance than those with relatively low stigma of seeking mental health.

Keywords: Chinese international student in Japan, student counseling, stigma of seeking mental health help, information